九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芸術工学分館所蔵の20世紀の椅子について

石村，眞一
九州大学大学院芸術工学研究院人間生活システム部門

https://hdl.handle.net/2324/13330

出版情報：貴重文物講習会. 16, 2009-01-22. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

芸術工学分館所蔵の20世紀の椅子について

芸術工学研究院　石村眞一

１．ワシリーチェア（トーネット・ムンドス社ではB３）

デザイン　マルセル・ブロイヤー（1902－1981）
1925～1932年に数回のマイナーチェンジをしている。

芸術工学分館所蔵のものは1927年のデザインで、おそらくアメリカのノール社の製品と思われる。

ワシリーチェアの名称は、バウハウスの教授であったワシリー・カンディンスキーのためにデザインしたことに由来するとされている。また通説ではブロイヤーが愛用していたドイツのメーカーであるアドラー社の自転車からヒントを得て、鋼管製の椅子をデザインしたとされている。しかしながら、問題なのは、鋼管製の椅子以前に真鍮管による家具は、19世紀よりヨーロッパで製品化されており、またコルビジェが指摘しているように、トーネット社の曲木の椅子が広く普及していたことから、パイプ椅子の発想に結び付ける要素があるので、ブロイヤーの発想が、アドラー社の自転車だけのヒントから展開したと規定するのは些か性急なようである。

ワシリーチェアーは、パイプのフレームと、布または革によって構成されている。布については、木製の椅子のデザインで既に用いていた構造である。パイプのフレームも1925年のデザインは4本脚であり、強度と安全性を確保するため、改良を行っている。複雑な曲げ構造も、断面二次モーメントを増すことを基本に意匠へと展開したと考える。

ブロイヤーは、1928年よりカンチレバー構造の椅子を次々と発表し、若くして家具デザイナーとしての地位を確立する。とにかく、常に時代の流行に敏感で、他人のデザインをリデザインすることが極めて上手なデザイナーであった。

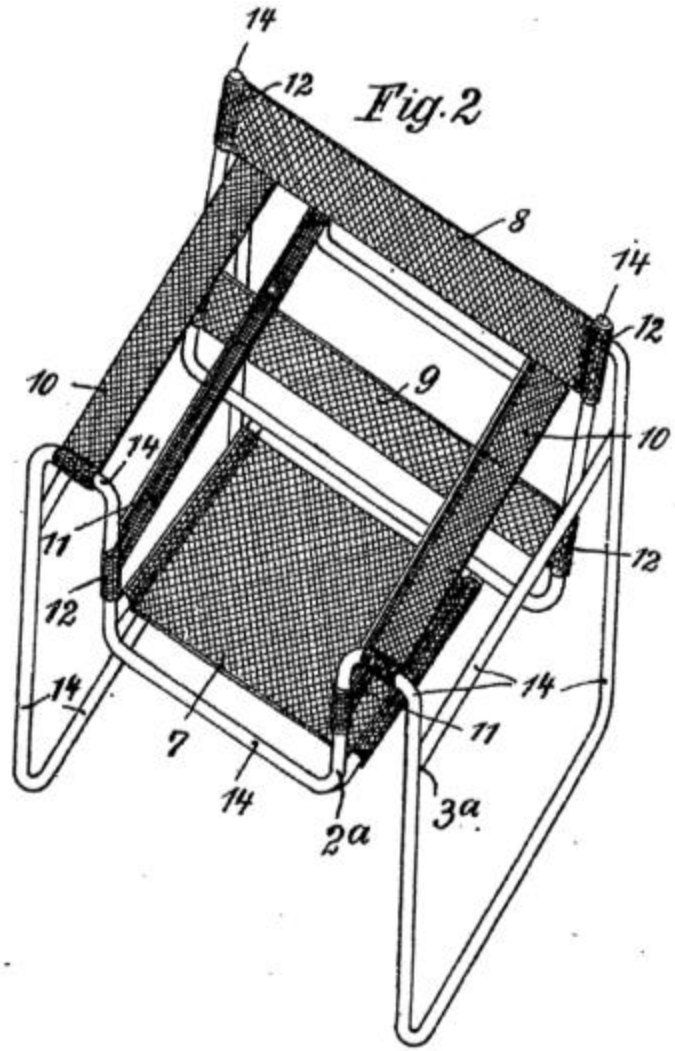
ワシリーチェア（部分）

マルセル・ブロイヤー
木製アームチェア　1922年

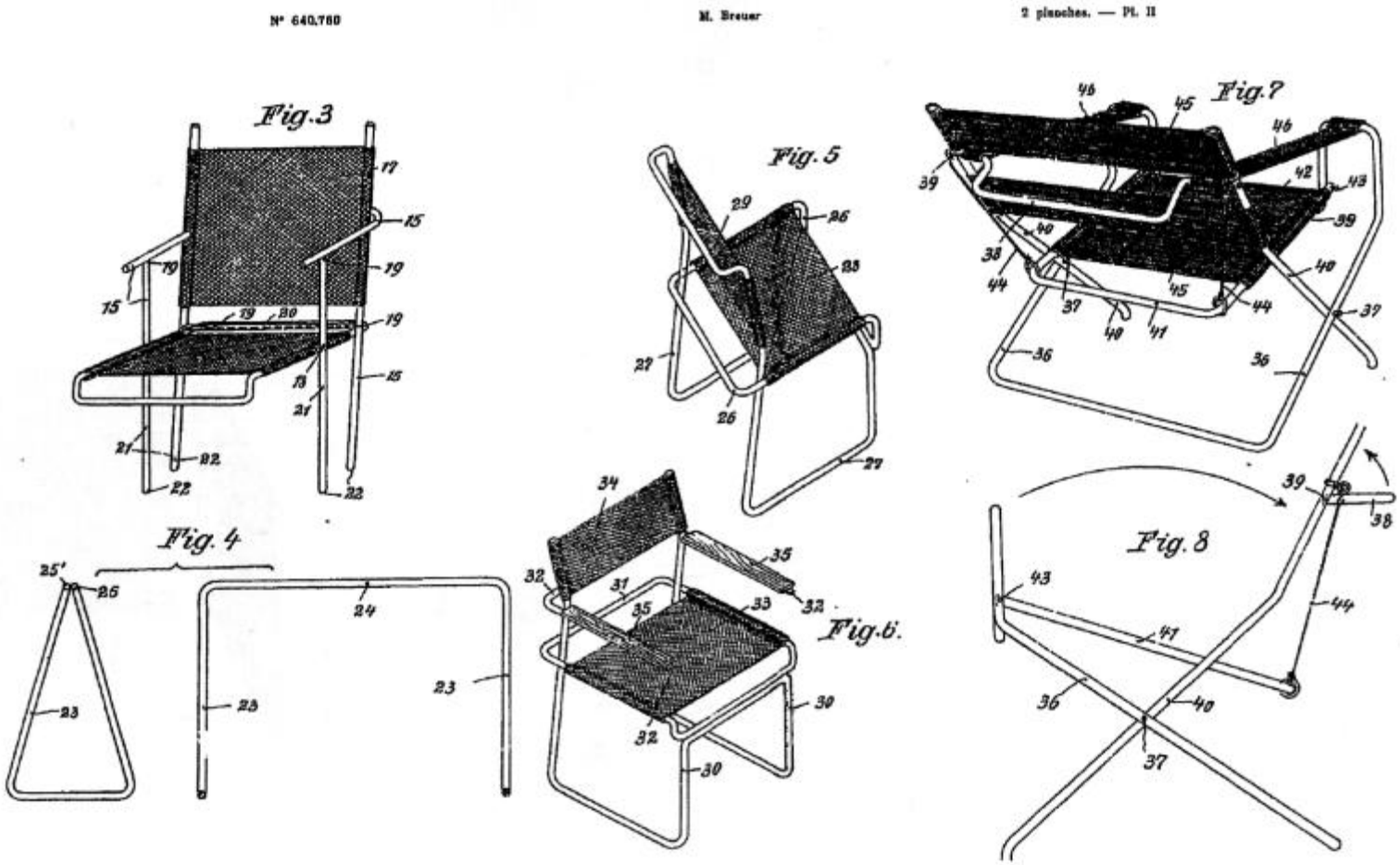
ワシリーチェア（B3）　1926－1927年
ドイツ　ミュンヘン博物館所蔵

ワシリーチェア（B3）　1931－1932年
ドイツ　ミュンヘン博物館所蔵

フランス特許公報　1927年　マルセル・ブロイヤー



フランス特許公報　1927年　マルセル・ブロイヤー



２．バルセロナチェア

デザイン　ルートヴィッヒ・ミース・ファン・デル・ローエ
（1886－1969年）
1929年発表

バルセロナ万博のドイツ館で展示された椅子で、スペイン国王アルフォンソ13世のためにつくられた。革張りでやや大型の椅子である。現在もファンが多く、人気がある。

ミースは1927年にカンチレバーの椅子をデザインし、ドイツのシュツットガルド郊外のヴァイセンホーフで開催された住宅展示場に出品する。いわゆるMRチェアと呼ばれる物である。この椅子をめぐっては、マルト・スタムがカンチレバー構造の話をミースにした後、真似をしたということで大きな問題に発展した。ヴァイセンホーフの住宅展示場で最初にカンチレバーの椅子を設置したのはマルト・スタムで、ミースは2週間以上遅れて展示している。そしてミースはすぐドイツで特許の申請を行う。実に巧みな方法でミースはカンチレバーの椅子をデザインしたということになる。

バルセロナチェアは、鋼管製カンチレバーの椅子の後にデザインされたもので、パイプではなく、鋼板（平鋼）を用いている。アイデアとしては極めて斬新で、現在も高い評価を得ている。鋼板を用いた椅子は、バルセロナチェアとほぼ同時期に、チェコスロバキアのブルノ市にミースが設計したチューゲンハット邸の椅子にも用いられ、ブルノチェア、チューゲンハットチェアとして現在も生産されている。

バルセロナチェア（部分）

ミース・ファン・デル・ローエ
MR10　1927年

著作権保護のため、
図版は削除しています。

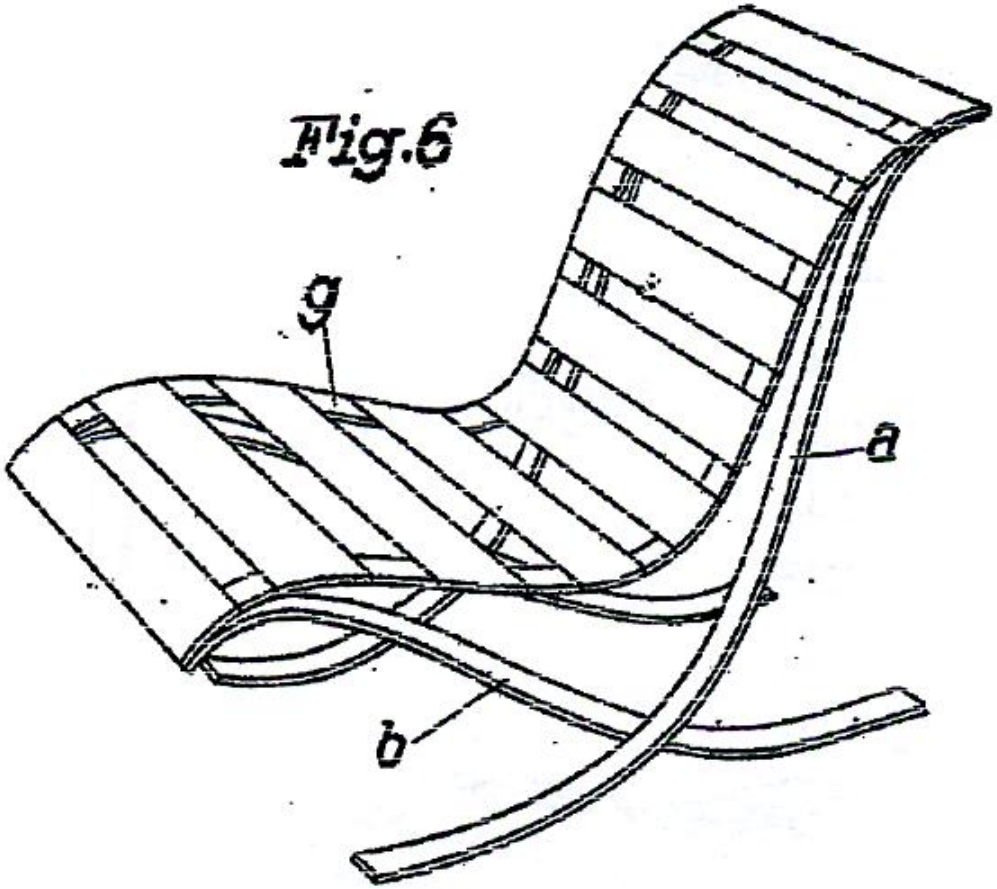
『1000 chairs 』より転載

ミース・ファン・デル・ローエ
MR20　1927年

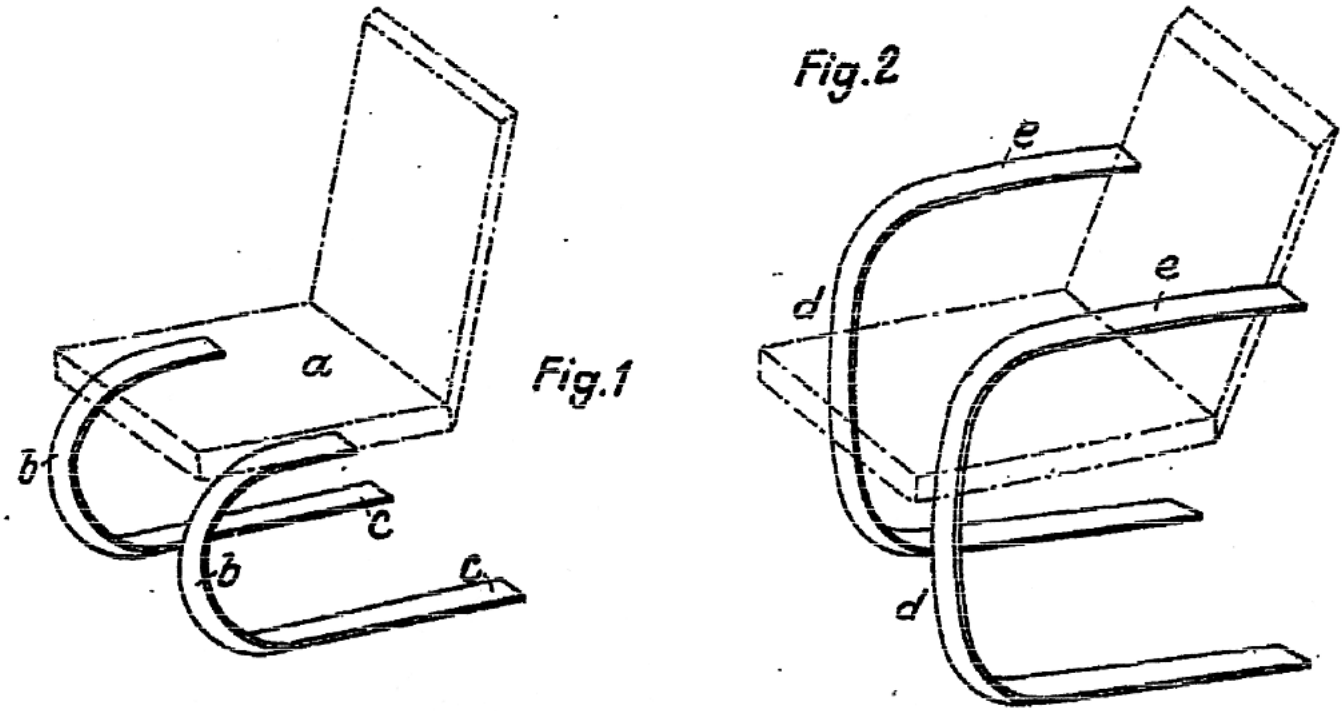
著作権保護のため、
図版は削除しています。

『1000 chairs 』より転載

ミース・ファン・デル・ローエのドイツでの特許出願図
1932年



マルト・スタムのドイツでの特許出願図
1933年



Druck der Österreichischen Staatsdruckerei in Wien.

３．ジグザクチェア

デザイン　ヘーリット・トーマス・リートフェルト
（1888－1964年）

1932－1934年に成立

デザインのプロセスが複雑で、両サイドに鉄板を補強したタイプや背に穴のあるタイプも検討された。また板の接合方法も多様で、ボルト・ナットで固定したタイプもある。

リートフェルトは建築家としても有名であるが、家具デザイナーとしての地位も確立している。ブロイヤーやアアルトにも影響を与え、常にオリジナル性にこだわっているデザイナーといえよう。日本人にも人気があり、展覧会も開催されている。

ルートフェルトの最も有名な椅子は、1918年に発表したレッド＆ブルーチェアであろう。この椅子は、彼の参加していた「デ・ステイル派」が主張する直線で構成されており、現在も生産されている。20世紀を代表する椅子の一つである。その後リートフェルトは、1920年代後半になると、成型合板の椅子をデザインする。この椅子も多くのデザイナーに影響を与えている。

ジグザクチェアは、鋼管製カンチレバーの椅子が全盛の時代にザインされた。木製では極めて難しい構造の椅子で、他のデザイナーが真似の出来ない構造、形態になっている。リートフェルトは、ブロイヤーやアアルトとは異なり、他人のデザインをリデザインするような手法は用いない。直線的な構成に生涯を通してこだわったデザイナーであった。

ジグザグチェア（部分）

リートフェルト
レッド＆ブルーチェア　　1918年
大橋キャンパス　３号館１階

リートフェルト
成型合板のアームチェア　1927年

著作権保護のため、
図版は削除しています。

『1000 chairs 』より転載

4. パイミオ No.41

デザイン　アルヴァ・アアルト（1898－1976）
1930－1931年に成立

アルヴァ・アアルトは、フィンランドの代表的なデザイナーで、建築、家具、ガラスの器等、広範な仕事をしている。日本でも人気があり、数多くの人がヘルシンキにあるアアルトの事務所で働いた経験を持っている。

アアルトの人気は、北欧のデザインに共通するシンプルで快適感の形態と色彩にあるといえる。パイミオNo.41は、パイミオのサナトリウムで使用することを目的にデザインされたもので、リラックスして座る角度に設定されている。使用している材はフィンランド産のものである。この椅子は1930年代に日本の『工芸ニュース』に紹介されており、アアルトの人気がいち早く日本に伝わったことが伺われる。アアルトはリデザインの天才で、ブロイヤーの造形観と共通するものを感じる。

1930年には、ブロイヤーのカンチレバーの椅子に、リートフェルトの成型合板の椅子を合体させたような椅子をデザインしている。

パイミオNo.41の中心になっている座部と背もたれは、成型合板であり、リートフェルトの影響を消化して自分のスタイルにしている。こうしたデザインの展開を、S・ギィーディオンは『機械化の文化史』の中で高く評価している。

アルヴァ・アアルト
Model No. F35　　1930年

著作権保護のため、
図版は削除しています。

『1000 chairs 』より転載

アルヴァ・アアルト
Model No. 31　1931－1932年

著作権保護のため、
図版は削除しています。

『1000 chairs 』より転載

５．スツール

デザイン　アルヴァ・アアルト（1898－1976）
1954年に成立
（似たタイプは1946－1947年にもデザインされている）

　このスツールは脚の形態と接合方法に特徴がある。成型合板によるもので、脚上部の形態はロココ様式をイメージさせる。この椅子はアアルトも設立に関与したアルテック社より発売され、現在も生産されている。シンプルで飽きの来ないデザインは、日本の成型合板を使用した椅子のデザインにも影響を与えている。

６. ラウンジチェアー

デザイン　ジョージ・ナカシマ（1905－1990）
成立年代不詳

ジョージ・ナカシマはアメリカのワシントン州スポーケンに生まれたナカシマは、ワシントン大学、フランスの美術学校、マサチューセッツ工科大学の大学院で学び、その後フランスでの生活を経て日本に渡る。1934年より東京のアントニン・レーモンド建築事務所で働く。1937年にはレーモンドの事務所を辞し、インドに渡る。アメリカで生まれた日本人が、ひたすら東洋的な感性を求めて旅をした。そして再度日本に渡り、レーモンド建築事務所から独立した前川國男の事務所で働き、アメリカに戻る。しかし、第二次大戦により、アイダホ州の収容所に抑留されてしまう。

ナカシマはこの収容所で日本人の大工と知り合いになる。家具づくりに興味を持つようになったのは、この大工の影響であったと語っている。1943年、レーモンドが身元引受人となり、東海岸のニューホープに移り住む。戦後家具デザイナー、家具製作者として活躍するが、ナカシマは欧米とアジアの伝統的な造形美に惹かれていった。ラウンジチェアの原型は、イギリス及びアメリカで発展したウインザーチェアである。一枚板の座面に脚と背もたれを接合した構造は、力強く、また繊細な造形が感じられる。

ジョージ・ナカシマの家具には、日本人が高度経済成長で失っていった伝統美を感じさせる。その家具は今も多くの人を魅了する。

ラウンジチェアー（部分）

ジョージ・ナカシマ
1961年

7. Murai Stool

デザイン　田辺麗子（旧姓村井）（1934ー）
1961年

1961年に天童木工は第1回天童木工家具デザインコンクールを実施した。その時の入賞作品が商品化されたのがMurai Stoolである。デザインしたのは村井麗子で、1967年にはニューヨーク近代美術館にコレクションとして収集された。田辺麗子はその後女子美術大学の教授として活動した。

8. Wiggle Side Chair

デザイン　フランク・オーエン・ゲーリー（1929ー）
1972年

カナダ出身で、南カルフォルニア大学で建築学の博士号を取得している。1967年より建築事務所を設立し、建築デザインを主に活動をしている。椅子のデザインでは段ボールを使用したものが多く、1970年代より話題性のある作品を発表している。

フランク・オーエン・ゲーリー
Easy Edges rocking chair　1972年

著作権保護のため、
図版は削除しています。

『1000 chairs 』より転載

フランク・オーエン・ゲーリー
Little Beaver　1980年

著作権保護のため、
図版は削除しています。

『1000 chairs 』より転載

９．Seconda Chair

デザイン　マリオ・ボッタ（1943ー）
1982年

10. CARB CHAIR

デザイン　片野　博（1945ー）